

Ⅲ．社会学からのアプローチ

1．社会学とスポーツ研究

矢澤 修次郎

今日はこのような機会を与えていただいて、本当はちゃんと準備してレジュメを作ってこなければいけないんですけど、このところ大変ばたばたとしておりまして、ルール違反ですがレジュメなしでやらさせていただきます。

わたくしにしゃべろというのは、わたくしが社会学大講座に所属しているので、社会学部の社会学とはなんなのか、スポーツ社会学をこれから社会学部において発展させるに際して、社会学というものがなんなのかを聞いておいてやろうということではないかと、勝手な推測をしております。ですが、一橋大学社会学部の社会学は、狭い意味での社会学ではなくて、社会科学としての社会学だと説明されていますから、わたくしのように狭い意味での社会学の出身で、狭い意味での社会学をやっている者の話など、聞いてもあまり参考になりますかどうか、大変心許ない感じがしております。

まず狭い意味での社会学をやっている社会学者の集まりである日本社会学会の会員数は、現在までに2500人をはるかに越えておりまして、3000人の大台に乗るのも時間の問題のように思えます。アメリカ社会学会は、2万人ほど会員がいますから、それに比べたら日本の社会学者の数は少ないのですが、それでも世界第二位の社会学大国であるようです。そして急激に社会学者の数が増えているようです。その理由は、いろいろあるでしょうが、特定の対象領域を持たずにあらゆる社会事象を対象にしており、専門分野としての専門性の壁がそれほど高くなく容易に参加しうることで、その一因であることは間違いないと思えます。

ご存じだと思いますが、社会学は自らの専門分

野の体系化にはそれほど関心を持っておりません。ですから社会学原理だとか社会学原論といった講義をするのにはそれほど関心がないんですね。社会学は、どちらかというと、境界侵犯学でして、社会学的物の見方を、あらゆる領域に持ち込むことをやってきました。ありとあらゆる領域に入り込んで、それに社会学という名前をつけて、「連字符社会学」をつくってきたのです。国際社会学会が4年に一度開催する世界社会学会議というものがあるのですが、その会議には世界じゅうから4000人程の学者が集まります。最も規模の大きい社会科学の国際会議の一つだと思います。その国際社会学会は、約50ほどの研究部会を持っておりまして、これが社会学における研究領域の広がりを示しております。スポーツ社会学もその部会の一つですし、経済と社会、法社会学、ぴったりした名前はないのですが、経営組織を対象に含み込んだ研究部会もあります。

このことを研究組織の問題として言い換えてみるとどうなるでしょうか。多少手前味噌になりますが、世界の学問の府に行けば、どのような学部にも社会学者がいて不思議ではないということになります。一橋大学を例にとれば、経済学部にも、商学部にも、法学部にも社会学者がいて不思議ではないし、いたほうが学問のために良いということだと思います。まったく手前味噌な話ではないことを証明するには、アメリカの事例に言及したほうが良いかもしれません。アメリカでは、社会学部には勿論のこと、ビジネススクールにも、法学部にも、経済学部にも、医学部にも、理学部にも社会学者はいます。

今、医療社会学、医療・保健社会学の研究が大変盛んになってきておりまして、世界的に見ると、

医学部に籍をおいたり、社会学部と医学部がジョイントで雇っている社会学者はかなりの数にのぼるでしょう。社会生物学や科学社会学などは、当然、自然科学の専門分野での研究が必要不可欠になっております。

もっとも、どのような領域にも入り込めるとはいっても、次の二つのことに注意しておきましょう。一つは、どの領域でも成功しているわけではないということです。成功しているところと、余り成功していないところと、成功の度合いの違いがあるということです。もう一つは、どんな領域にも入り込めるというメリットが有る代わりに、社会学はそのメリットの代価を支払わなければならないということです。

比較的的成功している領域には、環境や女性・フェミニズムといったものがあります。社会学内部には、環境社会学会が組織されていますが、会員数も多く、国際シンポジウムを開催したり、専門雑誌を発刊したりしております。他の専門分野よりも活発に活動しているのではないのでしょうか。女性・フェミニズムについては、言うまでもないでしょう。その研究においては、社会学者は無くてはならない担い手であることは間違いありません。

社会学が支払わなければならない代価は、色々ありますが、ここでは二つ挙げておきましょう。一つは、社会学はいろいろなことをやってるようだが、結局のところ訳の分からぬ学問だとの評判が定着してしまうことです。日本においては、市民社会が形成されていないことを反映して、特に社会学はなんだか訳のわからぬ学問だとの風評が定着しているようです。もう一つは、社会学はちゃんとした対象領域を持って研究している人たちから、おまえたちは対象領域に習熟していないのではないかという、痛烈な批判をうけがちだということです。社会学から教育や法や医療の領域に進出した研究者たちは、教育や法や医療の専門家の厳しいチェックを受けざるをえません。そのチェックは、時として過度なものになる場合があります。社会学的物の見方と対象領域の微妙なマッ

チングが成功してはじめて、社会学は本領を発揮することができるのだと思います。社会学的物の見方が勝ちすぎてもいけませんし、専門領域の厳しいチェックが勝ちすぎても、うまくいきません。

このように社会学の性格には、プラスと思われるところもマイナスと考えられるところもあります。しかし私には、社会学にはマイナスと考えられるところよりはプラスと考えられるところの方が多々あるように思われます。一つだけ重要な例を挙げておきましょう。今社会科学は、ディシプリンの時代からイシューの時代へと移りつつあります。人類にとって焦眉の課題を、われわれがどのように解決していくかが問われているのです。その解決のためには、一つのディシプリンではどうにもなりません。沢山のディシプリンが協力し、しかもその協力の中から個別のディシプリンを超えた新たな総合的にして実践的な社会科学を創造する必要があるでしょう。その際に社会学は、その運動の中心を担える十分な資格をもっていると思います。その資格は、ディシプリンの体系化に執着するよりも、あらゆる領域に入っていき動きのなかで養われたものに他なりません。

社会学が領域侵犯学であることに関連して、社会学の衰退論が叫ばれたこともありました。その議論の中心的な論点の一つは、アメリカの社会学部や社会学科に所属する研究者の数や財団からの研究助成金の額などに関する統計数字に基づいて、社会学の衰退を判断するというものです。

しかし、この議論にはいささか問題があるように思います。なぜかと言えば、社会学は境界侵犯学であると同時に、核分裂科学でもあるからです。例えば、社会学においては家族の研究は中心的なテーマの一つですが、家族研究はそれ自体専門化してファミリースタディーズを作り、社会学部から独立していきます。同じように、犯罪社会学も社会学の重要な一部分を構成しますが、それもクリミノロジーとして、独立していく傾向にあります。労働社会学もレイバースタディーズとして独立していきます。どの学問にもそのような傾向は有ると思いますが、社会学にはその傾向が一段と

強いように思います。だから、社会学者や社会学部、社会学科が数的には減少したとしても、社会学は形を変えて発展している可能性があるのです。社会学は核分裂していくことにそれほどこだわりがありません。他の学問にもその傾向はあるのですが、それぞれの明確な対象領域にこだわることで、既存の学問のプレスティッジにこだわることで、核分裂を抑制しているのではないのでしょうか。またこの社会学衰退論の背景には、1960年代に社会学が若者の反戦運動・対抗文化運動の理論的基盤を提供したことが、保守化の過程のなかで痛烈なしっぺ返しを受けた、という現実があるのですが、その議論はそうした現実を計算に入れていないことも指摘しておかなければなりません。ギリシャの独裁政権が禁止したもののなかに、ピートルズと社会学が入っていたことは、名誉なことであり、永遠に記憶されるべきものだと思います。

少し時間を使って何故こんな話をしてきたかという、これまで話した社会学の強みと弱みとが、スポーツ社会学にもストレートに反映されるかもしれないと思うからです。今スポーツ社会学といえば、日本ではすぐブルデューのスポーツ社会学が目されると思います。またエリアスも注目されます。最近彼の文明化とスポーツの研究が翻訳されましたね。私は、このような研究は第一級の社会学的研究の成果だと高く評価します。しかし例えばブルデューのスポーツ社会学は、近代フランス社会学の伝統（デュルケーム学派、マルセル・モースなど）のなかから出るべくして出たもので、きわめて社会的でして、むしろスポーツを専門領域としておられるスポーツ研究者に、その社会学の問題点を指摘していただきたいという気持ちで一杯です。スポーツ社会学として、あれで良いのでしょうか。スポーツをうまく社会的に切れば良いというならそれで終わりですが、スポーツによって社会学が批判される側面はないのでしょうか？

現在、哲学や社会学では身体論が流行していますね。ですが、そうした議論においては、血の通

った現実の肉体に出会えることは殆どありません。それは、ブルデューのお弟子さんであるルーイック・ワキュアントが言うように、とても皮肉なことです。それらの議論は、人間の肉体がおこなう現実の実践、人間の肉体を構成している表象について、深い洞察を与えてくれるものには、残念ながらないのではないのでしょうか。換言すれば、社会構造と現実の身体とがどのような関係にあるのかが、うまく詰められていないように思います。ここを詰めていくことから、新たなスポーツ社会学を発展させることができるのではないのでしょうか。情報社会論においても、身体論の重要性が指摘されています。しかし現在のところ、身体論といっても、せいぜい脳と情報の問題がストレートに結びつけられているだけで、身体の問題全体が考えられているわけではありません。やはり、血と肉のかよった身体全体が問題にされなければならないでしょう。身体の実践を対象にするスポーツ研究者は、とても大事な位置にいると思います。

さて、このような問題意識を持ったとすれば、どのようなスポーツを研究したら良いのでしょうか。これはもう皆さんの判断を待たなければならないと思いますが、私は先のワキュアント教授に習って、ボクシングを検討してみようと思います。なぜボクシングかと言えば、良く言われているように、ボクサーは身体そのものであって、ボクサーは身体を資本として、その生産手段を最大限に磨き上げることによって、生きていくのであるから、身体全体の論理を最も良く体現したスポーツだと言えそうであるからです。

ルーイック・ワキュアントは、フランス人ですが、シカゴ大学のウイルソンのもとで学位を取った社会学者です。彼は、良きブルデューの理解者で、アメリカの黒人問題、都市ゲットーの研究をしています。彼は、ブルデューの終わったところから、ブルデューの論理をより一層発展させようとしている社会学者といったら良いのでしょうか。彼は、シカゴのサウスサイドの黒人ゲットーの研究をしています。そこは、大半の若者が犯罪者に

なったり、ドラッグに溺れたり、社会というものがほとんど体をなしていないところです。そのゲッターで彼は、ボクシングジムに所属し、みずからをボクサーとして鍛え上げるとともに、その活動を通して、ゲッターの参与観察をおこないました。言うなれば、彼にとってのボクシングは、社会が解体してしまったところで、身体資本を鍛え、それを使って身体資本論を展開するものに他なりません。

要するに、ここでのワキュアントにとって、ボクシングは、既成の社会によって最小限にしか形づくられていない黒人が、身体そのものを資本にして、身体の論理を極限にまで展開する、身体の論理を純粹な形で取り出すことの出来るスポーツなのではないでしょうか。もっとも、スポーツ研究を専門にしている人のなかには、ボクシングはブルータルだからやめたほうがいいのかと言われる方もいると思います。事実、生命の危険さえある野蛮なものだから、禁止した方がいいという意見もありますね。私もそのような意見があることはよく承知しています。ただ私、それにワキュアントがボクシングに着目するのは身体の論理を極限的に示してくれるからです。あるいは、ボクシングでなくてもアメリカンフットボールでもいいのかもしれませんが。あるいはバスケットボールでも、他のスポーツでもいいのかもしれませんが。ただボクシングは、アマチュアとプロのギャップが最大のものだと言えらると思います。他のどのスポーツよりもそのギャップは大きいんですね。日本では相撲が、プロとアマチュアのギャップが最も大きなスポーツでしたが、最近では学生相撲の出身者がすぐ幕下で相撲を取れるのですから、だいぶギャップは縮まりましたね。ボクシング、特に重量級ではそうはいかないでしょう。どうやらボクシングのチャンピオンは、身体資本を極限にまで磨き上げているようです。それを学ぶことによって、身体の論理を巧く取り出そうということです。

さて、ワキュアントは自分自身のトレーニング、参与観察、コーチ・トレーナー、選手などへのイ

ンタビューを通して、次のような形で身体が資本であることを明らかにしています。なによりもまず、ボクサーはなににアイデンティファイしているかと言えば、ボディーにそうしている。ボクサーは自分自身がボディーです。それは人生の総てであり、手段でもあるし、客体でもあるし、媒体でもあるし、職業的なファイトの結果でもありません。彼の全存在は、ボディーをなんとかすることによって、ボディーを変えることによって、あるいはマニピュレートすることによって成り立っているのです。だからボクサーは、彼に依れば、身体資本の経営者だということです。ボクサーは、ジムで練習を積むことによって、抽象的な身体資本を、専門的なボクシングのフィールドで価値を生産することのできるファイターの身体すなわち拳闘資本へと転化させていきます。ボクサーにとって、身体は資本であるとともに、生産手段でも、原材料でもあり、身体資本と身体労働が相互に依存しあいながら転回していくこととなります。

またワキュアントによれば、ボディーは資本ですから、巧くマネージすればボディーは価値を生み落とすことができるのですが、そうなるためにはボクサーがその身体の限界を知り、彼が身体力を極大にし、ゲームに勝つための身体的工夫をこらさなければならないのです。またボクサーの身体は、記号、象徴のシステムですから、その身体を防御したり攻撃するためには、それらを解説する術を学ばなければなりません。

ボクサーは身体そのものを命と考えていますから、その身体にできるだけ投資して、それを鍛え、かつまたその身体の内的な限界を明確に意識しておくことが大切になります。その身体の内的限界というのは、さしあたり、世界タイトルマッチの際に新聞に発表される対戦者の身体測定値と見ていいでしょう。ニューヨーク・タイムズ紙などには、対戦者の詳細な身体測定値が発表されます。年齢、体重、身長、リーチ、胸囲（通常、拡大された場合）、二頭筋値、前腕、手首、こぶし、ネック、ウェスト、もも、ふくらはぎ、などがそれです。われわれの想像以上にボクシングが全身ス

スポーツで、身体の自然的な条件が勝敗に大きく作用することが予想されているのです。これらの数字に、その選手の持っているスタミナ、顎の強さ、パワー、顔面の強さ、敏捷さ、ボクシングのスタイルなども重要なものとして、付け加えられるでしょう。これらの数値は、勿論、持って生まれついたものも多いことでしょう。しかし大切なことは、われわれ人間有機体は、他の生産手段とは異なり、柔軟性、可塑性に富み、自己変革可能な主体に他ならないということです。ボクシングの場合、その人間の身体を闘争機械に変えていく社会的工場の役割を果たすのが、ボクシング・ジムなのです。ですから、そのジムの問題を考察しておくことが極めて大切です。その考察は、多くの身体の論理を明らかにしてくれるでしょう。それと同時に、ジムとブラックゲッターが敵対的共生関係にあるということの意味をわれわれに教えてくれるでしょう。

ワキュアントに従って言えば、ボクサーがジムでやることは、身体の各部分を鍛えるだけではなく、有能なボクサーに必要な「姿勢群、動きのパターン、主体的一認知的状態」を彼らの身体的シェーマに刻印することを目的にして、有機体を極めてインテンシブに、かつまた十分にコントロールが効いた形で動かす」ことです。言葉を変えて言えば、それは、ボクサーの身体的な世界を再編成して、一定の器官や能力を磨き上げたり他のものを背景に退けたりすることによって、ボクサーの身体的なものだけではなくて、ボクサーがその身体について、あるいは彼を取り囲む世界について持つ意識をも再組織することなのです。したがってこのボディークワークの結果、良いボクサーは自己と対戦者の身体の限界点、閾値を十分に掴むことができ、そのことがボクシングの勝敗を左右することになるのです。

しかし、ボクシングは以上のようなボディークワークが大事なのですが、それだけでボクシングは良いのでしょうか。いえそうではありません。ワキュアントが多くのコーチへのインタビューから明らかにしたように、ボクシングはそれに加えて、

精神と身体の規律と犠牲なしには巧くやることはできないのです。犠牲は、職業ボクサーの信念体系の核にあるものです。犠牲と言うのは、休むことなく身体を使い身体に働きかけることによって、個人の持つ衝動や願望を方法的・合理的に、身体的な卓越性の追求に従属させることを言います。ウエーバーの概念を使うならば、犠牲は世俗内の身体的禁欲主義と等価なものと言えるでしょう。

ではボクサーは、なにを犠牲に、なにを禁欲するのでしょうか。それは、食べ物、社会生活、セックスの三つです。この犠牲は、われわれの想像をはるかに越えて、ボクサーの生活の深部に及んでいます。生活は、完全に身体資本のケアと蓄積に中心が置かれます。例えば、ロードワークが朝5時に始まり、夜は早くベッドに就いて、8時間十分に睡眠をとらなければなりません。こうした生活は、俗に言う「ノーマルな生活」とはかけ離れた生活です。そして驚くべきことに、ボクシングは性的な生活も完全にコントロールしないと試合には勝てないと言われているスポーツなのです。アメリカンフットボールでも試合の数日前からセックスは禁止されるそうですが、ボクシングでは試合の数週間前から禁止されるそうです。セックスは、願望を規制する力を乱すと考えられていますから、それを排除し、身体の完全な力をコンサーブすることを目指すことになります。これだけ禁欲を迫られますから、ボクサーは試合が終わると、自己の欲望が暴発し、性に耽ったり、暴飲・暴食することが多いそうですね。

この禁欲が重要であることに関連してワキュアントは、身体の統治は「チームワーク」が要求される集合的な企てであることに注意を喚起しています。この点はボクシングが個人スポーツであると考えられていることからして、見落とされがちですので注意する必要があります。実際のところボクシングは、ボクサー、トレーナー、マネージャー、親戚、友人、妻などが協力してボクサーの身体資本を完全に管理してはじめて可能になるスポーツなのです。ボクサーを囲む社会関係の総体を、ワキュアントは「準パナプチコン装置」と呼

んでいます。では、衆人監視の下で24時間身体資本の蓄積のために禁欲的な生活を送ることを可能にする条件とは、一体、なんでしょうか。その条件の一つを、ワキュアントは人種や階級に基盤をおいた価値剥奪状況に置き、その状況を否定しそこから脱出することこそ、その禁欲の根拠であるとしています。

さらにワキュアントによれば、ボクサーはリスクを承知で、資本を投下する点で、経営者に似ている、と主張しています。何故ならば、ボクシングが相手の身体を破壊しようとして、自らのそれをも危険にさらすことになるからです。どんなスポーツにも怪我はつきものだと思いますが、ボクシングはなかでも飛び抜けています。統計によりますと、ボクシングでアメリカでは、1946年から1979年の間に335人のボクサーが死んでいます。多くのボクサーが、何度も死ぬのじゃないかと思った経験をもっていると発言しています。それにもかかわらず、ボクサーはボクシングをやり続けるのです。死なないまでも、脳に障害を受けて日常生活に支障をきたすことになってしまった事例も多くありますし、あまり知られていないことですが、ボクサーの受ける傷害のうちで最も典型的なものは、手の変形と痛みだそうです。アリもシュガー・レイ・レオナードも、この傷害に悩まされ続けたと言われています。その他、目への傷害、様々な外傷、内臓疾患など枚挙にいとまがないくらいです。

でも、ボクサーは死をしばしば意識するほど自分たちの職業がリスクを伴うものであることを強く意識している一方で、実際上はつとめてそのことを考慮しないようにしているように思われます。このギャップはどう説明すれば良いのでしょうか。ワキュアントによれば、その第一の要因は、闘いそのもののプラグマティクスがリスクをボクサーに意識させないようにさせるためだそうです。リスクを意識していたのでは、十分攻撃的になれず、勝利を収められないでしょう。第二の要因は、ボクシングの世界は、一つの閉鎖的な世界、自己完結的な社会関係、文化的な意味のまとまり

を形成しており、それがプリズムになって、ボクシング自身の論理とは相容れない外部的なインフォメーションや判断をブロックしてしまうのだそうです。ブルデュ的な言い方をすれば、特定の形態の資本の生産、再生産を目的にした物質的、象徴的交換の相対的に自立的な空間としてのフィールド、拳闘フィールドが成立していて、そのフィールドに独自の解釈の枠組みがあって、それが危険意識を排除しているというのです。まあ、危険意識を排除しているだけならまだ良いのですが、正しいトレーニングを積まない人に、犠牲をちゃんと払わない人に、技術を磨かない人に、ゲームに全力を傾けない人に、怪我は起こるのであるという集合的幻想ができあがるようになると、問題は大きくなりますね。二つの要因は、さらに外的環境によっても、強化されることになります。というのは、ボクサーの多くは暴力的な犯罪が多発する地域に住んでいて、死というものを見慣れていますから、自らの職業に危険がつきまともって、あまり気にすることは無い、ということになりますから。

以上のように二つの要因を考えてきたワキュアントでしたが、究極的には、ボクサーにも、プロテスタントのビジネスマンと同じことが起こっているのではないかと何を指摘します。プロテスタントのビジネスマンは、地獄に落ちる恐怖を払拭するために、自らの職業に没頭したのですが、ボクサーは怪我や敗北の恐怖を払拭するために、ボクシングに倍加された献身をおこないます。だからボクシングの集合幻想の最強のルーツは、彼らボクサーの身体に根ざしていることになります。ワキュアントは、特定の宇宙とその状況を積極的に受け入れていくルーツは、意識や文化的ディスコースを越えたもっと根源的な身体のレベルにあるのではないかと、言っているのですが、それを彼は準オルガニスムミックなコミットメントと言い換えています。

この点は、ちょっと分かりにくく、かつまた重要なところですから、彼が似ていると言っている麻薬中毒の事例を使って、もう少し説明しておき

ましよう。麻薬中毒患者の場合、意識のレベル、言説のレベルでは、これ以上麻薬におぼれつづけたら死んでしまう、廃人になってしまうということは十分わかっているわけですね。しかし、それよりも根源的なオルガニスムなレベルでは、どうしてもやめられないわけです。ボクシングも同じように、この根源的な準オルガニスムな次元にルーツを持ち、その上に、ボクサーの心一身複合体と拳闘フィールドの展開双方を統治する基本的なシェーマを作り上げてきたのでしょう。ボクサーは、身体で言葉に表されていない性向や技術、技巧を体現していくことになります。だから、ボクシングは、功利主義的に説明することも、文化論的に説明することも、合理的選択論的に説明することもできません。ボクシングは、拳闘のハビトゥスとそれを作り出すフィールドとの間の無意識的なフィットによって成り立つ世界なのでしょう。

そろそろ結論を急がなければならない時間になってしまいました。これだけは、おわかりいただけたと思いますが、血と肉のかよった身体のない文化的身体論全盛の時代に、本当に必要なのは血と肉のかよった身体論なのではないかということ。ワキュアントが明らかにした準オルガニスムなコミットメントの重要性は、こうした身体論によって明らかにできるのではないか。スポーツ研究からも身体が消える傾向にあると言われている今日、スポーツ研究は本物の身体を取り戻す必要があるということです。また、ワキュアントのボクシング論を辿っていくと、ブルデューが明らかにしようとしたのは、マルクス、ウエーバー、デュルケーム、フロイトその3者の間の失われた円環を探し、それを明らかにする仕事だったんだということが良くわかりますね。意識的な実践だけではない、エートス（生活態度）だけでもない、集合表象だけでもない、無意識だけでもない、無意識と意識の境界に根ざしながら、そこから出発して、ハビトゥスの論理、実践の論理を明らかにしようとしたのが、ブルデューなのだ。

私は、学部内部でも、大学のなかでも、異質な

ものの共存を作り出していくことが大切であると考えています。ですから、スポーツ社会学を専攻する皆さんが、異質なものを持ち込んでくださって、それをめぐってわれわれと討論し、総合的な社会科学を作っていくくださることを期待しています。今日は大変荒っぽい舌足らずな話になりましたが、またいつでも皆様に話をする機会があることを前提に、今日のところは荒っぽいままに終わらせていただきます。どうも有り難うございました。

【質疑応答】

藤田：どうもありがとうございました。3時間になろうという、長いレクチャーでした。少し質問をする前に休憩を5分ほど取りたいとおもうんですがよろしいでしょうか。

矢澤：いや、取りたい人は取り、続けたい人は続けるというかたちで。。

唐木：シカゴの話でボクシングジムは敵対的共生をしているという話がありましたが、あれを説明していただきたいのですが。

矢澤：敵対的という言葉の方が適切かどうかは分からないんですけど、やっぱりシカゴのゲトーですから、かなりドロップアウトしちゃう部分が多いんですよ。だからそういうものに対してやっぱ完全に相即的じゃないんですね。ボクシングのジムはシカゴのゲトーの論理をそのままある意味で受け継いでる側面と、それを完全に否定してというか、それとは少しコントラディクトリーなロジックっていうものがないとジムが成り立たないんですね。それをいわば敵対的共生というふうに表現しているんです。

藤田：それは、そのボクサー自身っていうんじゃなくて、ジムのレベルですか。

矢澤：そうです。読んでびっくりしたのは、ジムっていうのはすごく大事なんだそうです。ジムに

は、ものすごくきちっとした決まりがあって、ジムの中に入ったら話をしちゃいけないだとか、いろいろな書いていない掟があってですね、それに従わないとジムの所属が認められないんだそうです。ですからそういう意味では、ボクシングを勉強するそれ自体がですね、かなりの人にとってはそうすんなり受け入れられることではないんですよ。ですから、統計を見るとジムにいく人はかなり数は多いんですけど、2〜3週間でドロップアウトする比率がすごく高いんです。サウスサイドのゲットーの中心にあって、そこからいろんなボクサーが出てますから、ゲットーの中ではプレステージは高いですよ。プレステージは高くて入門する人はかなりいるんだけどドロップアウトする人が大部分で、そしてジムに来たらサクリフェイスっていうさっきのトータルなグリーディーなインスティテューションがありますから、そういうことをやらなくちゃいけないことになっている。そういう意味ではジムそれ自体がやっぱり、ゲットーとはオポジショナルな共生関係にあるんじゃないかと考えるわけです。

なぜオポジショナルなことが必要かという点、アメリカのゲットーは、確か川口先生の研究にもあったんですけど、バスケットボールとか、そういうスポーツを通じてコミュニティ建設とかいろんなことをやっているんですけども、そしてそれもたくさん成功例はあるんですけども、どちらかというそれはシカゴのサウスサイドほどひどくないですよ。サウスサイドはほとんど壊れているわけで。もし、そういうところに来ない人は完全にドラッグの売人になったりギャングになったり、クリミナルな世界にいくわけです。そういう意味では、それと社会という極限の間での関係をどういふふうにつけていくかっていう点では、もう少しいろんな検討が必要で、その時にですね、ゲットーにおけるスポーツと社会との関係ではオポジショナルということが非常に強調されているんです。オポジショナルっていうのがいいかどうかは別にして、緊張関係がきちっとないとむしろスポーツと社会はつながらない。

あの唐木さんの質問はオポジションっていうのはおかしいんじゃないかっていうことですね。

唐木：言葉自体がですね、どういう意味かなって思ったんです。緊張関係という意味であるということとはよくわかりました。完全に同化してしまったらジムの存在はないと・・・。

矢澤：ただコミュニティっていうような単位で考えると、コミュニティ・スポーツっていうようなこともあると思うので、そういう側面ではやはり問題はありますよね。つまり、スポーツを中核にした・・・、おそらくシカゴでは、今はちょっと違うんですが、この研究をした段階ではまだバスケットボールが弱かったんです。今はシカゴ・ブルズがいて強いでしょ。ボクサーは親近感を持っているのはどちらかっていうとアメリカンフットボールのチームでね、シカゴ・ブルズには親近感を持っていないんですよ、この時期は。今だったら違うと思いますけれど。ただ、それと同時に、ボクサーはアメリカンフットボールのほうに親近感あるんじゃないですかね、どっちかというと極限に近いですから。

やっぱり、たしかにコミュニティ・スポーツっていう点では非常に問題があるので、どういうことを考えたらいいいのかってことは、ちょっと問題解決ないですけどね。むしろ、ぼくは最初にシカゴでこの人達にあったときに思ったことは、もしかしたらこれはコミュニティを再建する一つの糧になるんじゃないかというぐらいには思ったんですけど、それは予想はずれました。つまり、ボクシングをよく知ってみると、とてもじゃないけどドロップアウト率が高いので、ちょっと、そういうものには成り得ない。

藤田：閉じられた世界という意味では、今のお話をお聞きすれば、ボクシングの世界はいっそう閉じられたっていう感じがあって・・・。

矢澤：ただ、逆にこういうことがあると思うんですよ。本当にさっき言ったようにからだの中に内在化するっていうことが、はたして他のスポーツでどれくらい出来るか。つまり、ものすごい条件が悪いわけで、かなり、身体的に再建しないとい

けない側面があるわけですよ、ゲッターっていうのは。つまり、子どものころからきちっとしたソーシャライゼーションがされてないわけですから。そういう意味では、たとえばバスケットボールみたいなものが出来るのかという、そういう問題が逆にあるんですよ。この研究は、コミュニティ・スポーツというようなものを考えることでやっているのではないので、ちょっとねらいが違うんですけどね。

藤田：もうあと時間がないので、論点をたてて議論をするという時間がとれないと思います。質問も意見もざっくばらんに出すという形であと30分を使うしかないかなと考えてますが。

唐木：簡単な質問ですが、さっきニューヨーク・タイムズの記事には、ボクサーのサイズが細かく書かれているとありましたが、一つは、個としてのボクサーの総力戦を象徴する意味があると思います。もう一つは、プロボクシングが賭けに通じるところからくるのではないかと思います。競馬うまのキャリアとか、サイズが問題にされるように、ああいうものとのアナロジーがあるのではないかな。そのようにうけとったのですが、いかがですか。

矢澤：それは、その通りかも知れませんね。それはいい指摘だと思います。確かに賭けっていうのはたいへんありますよね。

唐木：そういう考え自体が、その論文でいってるノーマティブなエグザンプル・エクストラネーションだと思うんです。私も、今までは、そのような意味でノーマティブに見てきました。しかし、紹介されたボクシング研究では、プラクティカル・ビリーブということで、構えをからだの中につくっていくという。これをノーマティブに解釈すると、今の競争社会の中で闘争というものを本能化していくことになる。本能の発揮ではなく、闘争精神なり闘争のためのからだの能力を本能にまで高めていく。そういう解釈もできるのではないだろうか。だから、そこまでいうとハビトゥスという言葉はそれに近いことになると思うんです。それは決してノーマティブな解釈と対立するもの

じゃないんじゃない。けっこう接点があるというふうに思うんですね。

矢澤：結果としてはそうなんだと思いますけれども、このシカゴ大学のウィルソンという有名な黒人の社会学者がいて、黒人の社会学者ではアメリカ社会学会第一の研究者なんですけれども、彼のチームがこういうことをやっているんですよ。彼らにはブラックコミュニティをどうするかっていう問題意識があるんですよ。社会学者っていうのはね、体制順応的なことをやっていたりしかからんといってよくウィルソンは怒るんですけども、それはやはり、ウィルソン先生は虐げられたものの立場から、ブラックコミュニティのところでこういう議論をしているので、それが一つと、唐木さんがおっしゃるように、確かにふたつの解釈があるんですけども、このスポーツ社会学の研究が明らかにしたことっていうのは、両方のところをどうやって統一するかっていう、結び合わせ方の問題でね、一方的に完全に背反するものではない。つまり、両方の論理みたいなものを取り入れて再構成することができるのかなということですよ。ですから、まったく背反的なものではない。今、ヨーロッパの都市がゲッター化してきているんですよ。それでヨーロッパの都市がゲッター化しないためにはどういう政策を取ったらいいかっていうんで、彼らはヨーロッパで引っ張りだこなんですよ。アメリカの中でっていうよりもむしろヨーロッパの中で活躍してたりしてるんですけども。日本なんかだとそういう論理はそのまま持ち込む必要がないので、おそらくスポーツ研究をされるときには、これをそのまま展開するというのにはちょっと無理があるのかなと思いますね。つまり、ボクシングの論理でも、日本なんかではすこし違うのかもしれないしね。そういう意味では、アメリカの社会的な背景っていうものが背後にあって、その中で身体論理みたいなものを突き詰めようというふうにしたものですから、その文脈を取り外して一般化しようとするときには、少し注意が必要だというふうにも思います。

高津：関連するんですけど。ジムに焦点を当てたということに関心があるんですけど。コミュニティー・スポーツとしての特性はなかったにしても、ジムそのものはどういう社会的なパースペクティブというか、アメリカ社会とのかかわりでとらえられているのかという、それとの関係がないとやっぱり、身体の問題になかなか結びつかないと思ひまして。

藤田：と同時に、それと関連して、そういう中での選手っていいですかね、育ってくる選手というのは、ゲットー社会の中でどういう位置を占めていくのかっていうところも合わせてご説明いただきたい。

矢澤：そうですね。ご指摘の通りです。ジムの話はかなり端折ってますが、ご指摘の点は興味深いところで、この研究のそういう意味での弱点の一つかも知れません。この場合は、有名なトレーナーがいて、その人が全面的に取り仕切っているようなジムでして、それをフォローするのにかなり時間を使っているようなところがありまして、ジムの性格やコミュニティーでの位置づけなどについて十分に扱われているというふうには思えないんですね。そういう意味で、この研究の弱点といえるようなものがそこにあるんじゃないかと思うんです。ですから、たしかにいわれたように社会と文化と身体とかというものを結び付けてとらえるときには、社会組織としてのジムと、そのジムがコミュニティーの中でどういうふうな形で人を受け入れて、あるいは、そこからどういう人を輩出していて、それがコミュニティー全体の中でどういうふうに位置づけられるのかという側面はもうちょっとつめていく必要があるかと思ひます。この研究はどちらかというボクサーのロジックみたいなものに中心を置いていますから、そこら辺のところがあるまじきちとした分析になってないというきらいがあります。ただ、私が端折ったところで、ジムの問題はかなりいろんなことが書いてあったことは書いてあったんですね。フィジカルな方を中心にしたので、そこらへんのところは少し意に沿わなかったのかも知れないんでた

いへん申し訳ないと思ひます。

それから、藤田さんのご指摘のところは、そのとおりになんです。その点はまだまだもうちょっと研究が必要で、あんまり明らかじゃありません。ぼくの子想だとですね、そういう意味では、非常にこのジムそれ自体はこの地域では非常にプレステージが高く、一つの結節点にはなっているんですけども、私が先ほどもいったように、かなりドロップアウトが多いんでね。ただ非常にいいところは、このジムの特徴っていうのは世界チャンピオンであっても1週間前に入門した人であってもまったく平等にトレーニングをすることです。それから、声をかけたりですね差別をすることはまったくない、と。そういうふうにもいわれてますし、ジムそれ自体としては、非常に、私の読んだ限りではきちとした運営が行われているようです。ただ、どっちかっていうとジムの詳しい記述はありませんで、トレーナーの個人的なパーソナリティーが非常に強いように思ひましたし、それからですね、どうしてもトレーニングがきちっと決められていて、トレーニングの順番まで決められていて、それにはロジックがあって、そのトレーニングの間にほとんど言葉によって教えていく。プラクティスをしながら教えていく。つまり、なにか理論的に理論を書いてね教えることはまずない。ですから、プラクティスの中で教えていって、いわば練習をする間にトレーナーがですねいろんな事を機関銃のように言うんですね。それをこの研究者が書き取ってですねジムのロジックみたいなものをちりばめて書いているというのが特徴だと思ひますね。ですから、ジムそれ自体の組織的な制度的な分析はあんまりこの中には登場していない。ですからそういう意味では、そういう側面から少し研究をしてみるというのが大事なのかも知れません。

藤田：早川さんどうですか。

早川：聞いていてなるほどなあと同時に、ぼくなんか何をやったのかなあという気がします。ただ身体に収斂していくということは、やはり今お話を聞いていると、ボクサーの中の無意識の世

界というか、その部分までいく。ある意味では悟りをひらいていくみたいなどころまで掘り下げる。そうした突っ込みが、社会学になるというふうにお話しを伺いながら聞いていたのですけども。

本当に社会的な、最後に言われた協同的なボクシングから何が見えてくるか、というところでの対社会的な関係が本当にそこから描き出されてくるのだろうかということにちょっと疑問も感じるので。

それに何が欠落しているかという、今前半の質問にもあったように、文化というものがもっている人間的な意味だとか社会的な関わりだとか、こういうふうなものが今の身体の極限的な問題の中で語り尽くされているのを聞きながら、その部分がより鮮明にして説得的になりうるかどうかというところが大きいなという気がします。スポーツ社会学において、あるいはスポーツ学でもいいのですが、いずれにしろそこでやっていこうとする課題を絞り込んでいくときに、今のお話ですと身体っていうものが何であるかをまずは解明する必要がある、そういう対象へのアプローチを明確にしたほうがいいということですね。もっと人間くさいといいたいまいしょうかね。確かに身体の部分っていうのは今いわれたような解釈がたいせつなのですけれども、もうちょっと違う関わり方もあっていいのではないかと・・・。

体育とスポーツの問題でいうと、特にわが国においては今まで身体というふうなものでなかなか入り込めなかった歴史的な関係っていうのがあった。どうしても無我の、無意識のところできつあかわれ、形成される身体という、戦前の天皇制軍国主義下での体育（体操）がとりあつかわれていたような、軍事力や労働力としての身体、つまり他者に強制される行為的な身体、のレベルで留まっていたという事もあるかも知れません。そういう歴史的な経緯があってなかなか体育の中で身体への過度な警戒心が働くというふうに、のめり込めない部分もこれまでにあったのですが、再度その部分を考え直すヒントを今日は与えてもらったかなという思いもあるのですけれど。

矢澤：私も早川先生のご発言にはそのとおりだと思っただけで、本来は私は文化の方を扱うのが得意なんですけど、今日はあえて、こういう話をすると最後は禅の境地かなんかになっちゃうのかも知れないなあと思いつつやりましたが、要はですね、どちらでもいいと思うんです。ですから、実際早川先生からご著書をいただいて早川先生がやってらした研究を大変興味深く読まさせていただいてるんですけど。

今日ボクシングの話をしたのは、やっぱり一つにはブルデューの到達点をどういうふう展開するか、若い研究者がですね。ブルデューにはできないボクシングというようなスポーツを、実際自分がボクサーとしてやって、中に入ってそういうことをやってるわけですね。ですから、そういうやり方も一つの方向だなあとということで、そちらの方を強調してみたんですけども。大事なのはですね、ブルデューっていうデュルケームの流れを汲む社会学者が、デュルケームやマルセル・モースがやりたいことをかなりうまくやってくれたという点では非常に大事ですし、それから、エリアスとかですね、そういう研究者がスポーツの研究等々でいろんな視座を提供してくれると、それは大事なんですけれどもそういう研究っていうものを、当然研究者ですから誰かそういう新しい視点とかいい視点を出すと、そこに何千人の研究者がそれをつついていくというパターンになるわけですね。それはそれでいいと思うんですが、ぼくが見た限りでは、あまりこちらの方を取る人間が少ないということで、今日はこちらの方を強調させていただいたということなんです。

それともう一つは、先ほども言ったんですけど、社会学というのは、環境なら環境でもいいんですけども、環境を今までの社会的な視点で切っても、あまりインパクトがないんで、そういう重要な問題が出て来たときには、その対象の側の論理を最大限教えてくれる人たちを求めるといえるんです。そういうふうになっていると、ぼくは、こういう研究を最初は強調してみたいということになるわけです。それを追求して行ってです

ね、少なくとも今のところひとつの収穫は、メルロ＝ポンティなんか現象学的なものを使いながら言ってることとこの論理が結論的には同じだということなんですよ。だから、ようやくぼくは、メルロ＝ポンティの結論を信用することが出来るようになった。哲学的にはたぶんそうじゃないかと、現象学の立場からですね、思ってたんですけども、きちっとボクシングならボクシングというものを通じてですね、同じ結論に到達した。文化論的な身体論というのは、どこへ行ってもボディー、ボディーって言ってるわけですよ。世界中がそういう状況になっているんだけれども、本当にボディーそのものを最大限に追求するようなところを勉強してみると基本的に同じ結論に到達したというのなら、それは非常に大事だというふうに思っているんです。ただ、じゃあボディーと社会と文化をどういうふうに連ねて研究していくかということになると、確かに今おっしゃったように、基本的な視座は色々出ているんだけれども、展開はこれからですよ。これを、きちっと展開していく際に、今いちばん欠けているのは何かかっていうと、そういう自然科学だとか、ボディーっていうものを、極限までですね、考えたり展開したりすることであった。そういうものを内在的に追求してみると、いわばメルロ＝ポンティがいつてるのと同じような結論に到達する。それが、ぼくには非常にありがたいし、「うん、これでいいんじゃないかな」という確かめができるんですね。ですから、その後の展開の仕方がこれからの問題ですから、みなさんが強調するように文化の問題とか、社会的な問題をここにはいれていかなければいけないわけです。どちらがいい、悪いという問題じゃなくて、われわれが普通日常では得られないものをやはり踏まえて、やって下さる、そういう方式をもう少しそちらの方の方々がやって下さった方がいい。やってる人間は純然たる社会学者なんです。スポーツっていうものを必ずしも専門にしてる人じゃないんで、そういう人がですねむしろ、ボディー・キャピタルっていう身体資本論みたいなのを展開して、肉と血を持ったフ

ィジカルなボディーっていうものを最大限に展開して、そこから出発しようとしてるっていうのは、私はそういう出発の仕方っていうものに非常に惹かれて考えているということだと思うんです。ですから、どちらかの立場をダメだといってるわけではないので、結論は同じになるのですから、これは非常に出発点としてはいいのではないかというふうに思ってるわけです。

私はボクシングそれ自体に関心があるわけじゃなくて、やはり、社会学の世界に身を置いていると文化論的な身体論っていうものがあまりにも今氾濫してるんですから。それはどうしてかっていうと、社会学それ自体がボディーの研究をしてこなかったわけですよ。それから、スポーツ社会学だって、今まではですね普通の社会学者の中ではほとんど存在しなかったというふうにもみていい。早川先生のスポーツ社会学の最後の方にある研究動向はですね、非常に詳細でたくさんの研究があることを教えていただいたんですけども、専門的な社会学者からするとこういうものはほとんど読んでいないんですね。それは社会学が今までスポーツっていうものを無視してきた。その反動みたいなのところもあります。今エリアスだとか問題にされるんですけども、日本ではほとんど、今までの社会学のテキストにはスポーツの社会学はないですよ。そういう意味ではボディーのない学問だったわけです。それからどっちかという二元論みたいなものに陥っていたところもあるわけです。身体とかそういうものを考えたとしても、いわばコミュニケーションの問題と身体の問題が切れてるというような、そういう二元論的な研究もありました。それからフランスを中心にした文化理論の中でボディーの問題が復活をして、それはデュルケム以来ずっとありましたから、フランスの文化理論っていうのがボディーの問題をですねうまくのせたのは、そのためだと思うんですけれども、そんな形でボディーの問題っていうのは社会的な課題になったわけなんです。ですから、社会学がヒューマン・ボディーっていうものをきちっと、いったん抱え込む必要がぼく

はあると思っているんですね。そうじゃないと実際にガーフィンケルという社会学者がいて、ガーフィンケルもいってるんですけども、やっぱり社会学っていうのは何かそういう実際の人間の身体っていうものが現実的にどうゆうプラクティスをし、どういふものをリプレゼンテーションしているのかっていうことを、いったん抱え込んで、いままでボディーの問題をきちっと考えてこなかったということを学問的にも反省してみる必要があるんじゃないかというふうに言ってるわけで。そのことをぼくは、ちょっと重視したんですね。

だけど、学説史的にいうと非常にむずかしいことで、そういうことをやっている人はむしろ少ないわけで、むしろ現象学なんかを使って簡単にボディーの問題っていうようなものにそれを社会学のなかに、社会科学のなかにとり入れようとしている。そこはですね、わたくしは必ずしもいいことではないというふうに思っているわけです。誰でもが簡単にですねその問題をそのなかに取り入れるというのは、私としてはちょっと納得がいかない。なんでこれだけ長い期間、ボディーの問題がサプレッションされてたんだと。そういうことが簡単にボディーの問題を取り入れてしまうと、どうもその蔑ろになるんじゃないか、何でこの百年ボディーの問題っていうのは社会科学の基本的な問題になってなかつたんだろうか。それが文化や社会構造の問題とどういふふうに関係づけられていくのか、そういうことが課題になっていなかったかかっていうことをやっぱり少し立ち止まって、考えてみないといけない。とするとどこから出発したらいいかという、もちろん二元論をとっていたものをもう一度統一する必要があるのですが、現実には文化的身体論のように逆の二元論におちいっているのではないのでしょうか。学問を研究している人間にとって、文化だとかそういうものを簡単に取り扱うところがあるんですけども、どうも肉体がないんですね。だから、あえて遠回りをしてそういうような問題を、迷路にいくのも覚悟のことで流れに抗して考えてみるというのも一つの手じゃないかなというふうに思うわけです

ね。ですから、決してそうじゃなければいけないというふうに言ってるわけではなくて、そういうやり方をとるべくみたいな例外がいていいんじゃないかと。今のところ言えることは、どういふ道をとろうとも基本的な結論は文化研究者とかですね、現象学的な形をとったりフランスの文化理論の立場に立ったりする身体論の研究者、そういう人の結論とそれほど到達点として違わなくなるんじゃないかと、そういうことがきちっと基礎づけられるという点は、とてもいいことではないかというふうに思うんですね。

藤田：時間が来ましたので、まだいくつか質問や意見がおりますが、あとがつかえておられるようですので、今回はこれで切らせていただきます。どうもありがとうございました。

(1996年2月27日)